

## 編 集 後 記

はじめに、本年5月2日、順天堂大学附属越谷病院神経内科教授 森 秀生先生がご逝去されたことを記します。森 秀生先生は、日本神経学会第9代編集委員会委員長をされていた、故 中野今治先生の時代からこれまで7年間の長きに渡り、投稿論文の査読に加えて、編集幹事として本誌の発展に多大なる貢献をされました。会員の皆様とともに心より哀悼の意を表したいと思います。

私は、臨床神経学の編集委員として8年目に入りましたが、多くのすばらしい論文に触れる事ができ、勉強させて頂いたことに感謝しています。臨床神経学は、症例報告を中心とする数少ないJournalです。ここに症例報告を書く意義を先輩の先生方の意見を参考にしながら考えてみたいと思います（昨年編集後記にも少し書きましたが、reviseしてみます）。

口頭発表だけではなく、文章にすることの意義は何なのか？

受け持った症例を正確に記載して、他者にしっかりと説明するためには、詳細な診察、問題点の考察、文献検索での最先端情報の収集、きちんとした経過のフォローなどが必要であり、神経内科医としての基本が身に付きます。そして、口頭発表よりも緻密さが要求されますので、自分の頭にしっかりとその症例が焼き付き、自らの知識や理解を

深めることができます。また、論文が世に出るためには、時には厳しい評価を受けることもありますので（臨床神経学の査読者は、常に教育的な査読を行っていることを申し添えます）、仕事の質を高めることができます。

一方で、他者は間接的にその症例が経験できますので、後に同様の症例に出会ったときには、症例の診断や治療にとっても役立ちます。そして、論文として残りますので、多くの人の眼に触れることができます。しかし、書かないで終わったら、自らの経験が活かされなくなってしまいます。症例報告を書くことは、臨床医としての重要な責務だと思われまます。

特に神経学の領域では症例報告は大切であり、アルツハイマー病やパーキンソン病をはじめとする多くの神経疾患は、元々症例報告から疾患単位が提唱され、そして疾患単位が確立しました。その後、病態の解明から治療法の確立へと発展してきました。

若い先生方は、日常診療で多忙な日々を送っておられると思いますが、神経学とともに発展させるために、ぜひとも臨床神経学に症例報告を書く決心をしていただきたいと思います。

（瀧山嘉久）

## 〈 編 集 委 員 〉

編集委員長 鈴木 則宏      編集副委員長 河村 満  
 編集委員 荒木 信夫   飯塚 高浩   池田 昭夫   亀井 聡  
 瀧山 嘉久   坪井 義夫   西野 一三   野村 恭一   星野 晴彦  
 編集委員（幹事兼任） 園生 雅弘   高尾 昌樹

「臨床神経学」	第56巻 第6号	平成28年6月1日発行	
編 集 者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル		一般社団法人日本神経学会
発 行 者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル		高 橋 良 輔
印 刷 所	〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入		中西印刷株式会社

発 行 所    〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル  
 日 本 神 經 学 会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>